

入学時期の在り方に関する懇談会「中間まとめ」のポイント

1. 大学教育の国際化の必要性

社会・経済のグローバル化が急速に進む中、人材育成への社会的要請、国際的な大学間競争に対応するため、大学教育の国際化を進めることが急務。本学のミッション、教育理念の実現のためにも、とりわけ学生の流動性を高め、多様性に富んだ「グローバル・キャンパス」を実現することが必須。

2. 4月入学を前提とする学事暦の問題点

本学の日本人学生の海外留学、留学生受入れは、特に学部段階で低調であり、海外有力大学と比べて遜色がある。秋季入学が国際標準となっている中、4月入学を前提とする現行の学事暦は、教育の国際化を進める上での制約要因。また、学期の途中で休業期間が位置づけられることに伴う教育の効率性をめぐる問題が存在。

3. 高大接続をめぐる問題点

受験準備の受動的な学びから、大学での主体的・能動的な学びへの転換のため、インパクトのある体験を付与することが有意義。高等学校の卒業時期と大学の入学時期とが隙間なく接続するシステムは、こうした転換を実現する上で、必ずしも適さない。

4. 学習体験を豊かにする柔軟な教育システムの実現

以上のような課題意識を踏まえ、「よりグローバルに、よりタフに」学生を育成するため、思い切った教育改革を実行することが必要。全員に国際的な学習体験を積ませるなど、新たな達成目標の下、多様な体験・個性を尊重する考え方に立って、将来の教育システムを構想することが適当。

① 学部段階の秋季入学への移行

春季入学を廃止し、秋季入学の二学期制へ移行（例えば、9月入学として夏季休業期間を6～8月に設定する等）（※ただし、大学院段階については、引き続き要検討）。

② ギャップタームの導入

4月から約半年のギャップタームを設定し、社会貢献活動、海外での学習活動、勤労体験活動、研究の現場に接する体験活動などを促進。体験活動を支援する仕組みを形成。

③ 優秀な学生への対応

早期卒業制度の導入など、大学院教育への早期のアクセスを可能化。

5. 総合的な教育改革の推進に向けた検討

秋季入学への移行等は、本学の教育理念の実現に向けた十分条件ではなく、国際化の推進（留学生の増加、英語による授業や外国人教員の増加、語学力の強化、国際的な質保証の要請への対応など）、入試・進学振分けの見直し、きめ細やかな経済的支援などについて、中長期的な観点に立った検討を進めていくことが必要。

6. 学外との幅広い連携・協力に向けた検討

本学における秋季入学への移行が所期の成果を達成するためには、学外からの幅広い理解・協力を得ることが大切であり、そのための環境づくりを検討することが必要。

（他大学）体験活動の推進に向けたコンソーシアムの形成、社会への働きかけなど

（社 会）企業における採用時期に関する柔軟な対応、留学等の体験への適切な評価など

（政 府）各種制度に関する弾力的な対応、大学改革に対する公的投資の拡充など